

J. S. バッハ：無伴奏チェロ組曲

全6曲の《無伴奏チェロ組曲》が書かれた年代は、ケーテン宮廷楽長時代(1717-23)の前期と推定されている。各組曲は「アルマンド／クーラント／サラバンド／ジグ」の4つの舞曲を基本としながら、第1曲に「プレリュード(前奏曲)」を、ジグの前の第5曲に「メヌエット／ガヴォット／ブーレ」のいずれかの流行舞曲を置く構成になっている。

「第1番」は、ト長調というチェロの運指に合った調性が、伸びやかな響きを生み出す。第1曲プレリュードは本組曲中もっとも有名な楽章で、中断なく続く16分音符の流れがその背後で進む和声を浮き彫りにする。第2曲は安らぎに満ちたアルマンド、第3曲はイタリア型の急速な3拍子によるクーラント、第4曲は優雅なサラバンド、第5曲には2つのメヌエットが用いられている。そして第6曲の軽快な短いジグで曲を閉じる。

「第3番」の第1曲プレリュードは、16分音符が淀みなく流れるスケールの大きな音楽。第2曲は、軽やかな愛らしさを感じさせるアルマンド。第3曲は、音階的な分散和音とスラーで奏されるイタリア型クーラント。第4曲は、典型的なサラバンドのリズムに旋律が勝っていく瞬間が美しい。第5曲ブーレは、演奏会用の小品として奏される機会も多い。第6曲は、終曲にふさわしい堂々としたジグ。

「第4番」は、本組曲のなかでは比較的地味だが、削ぎ落とされたようなシンプルさを備えている。第1曲は、分散和音の織りなす色合いが美しいプレリュード。第2曲は素朴なアルマンドで、第3曲のイタリア型クーラントは、リズムに新しい可能性を模索している。第4曲のサラバンドでは、清らかな旋律が和音をともなって歌われる。第5曲は同じ調性による対照的な2つのブーレ。第6曲はほとんど重音を用いず、速いテンポで流れていくジグ。

ヒンデミット：無伴奏チェロ・ソナタ

様々な楽器を弾きこなす多才な演奏家でもあったヒンデミットは、1920年に結成したアマール弦楽四重奏団でヴィオラを務め、チェロを担当したのは実弟ルドルフだった。1923年に作曲されたこの「無伴奏チェロ・ソナタ」も、おそらくルドルフの奏法に何らかのインスピレーションを受けていると思われる。全5楽章からなり、「しっかりとした運弓で」力強く弾かれる前奏曲風の第1楽章、それとは対照的にソフトなタッチで弾かれる第2楽章、チェロならではのゆったりとした重い旋律が流れる第3楽章、活発な4分音符で弾かれる短い第4楽章を経て、最終楽章では再び力強い表現に戻り、烈しいピチカート1音で曲を終える。

